谷崎潤一郎と中国

西田禎元

谷崎潤一郎が，初めて中国大陸を訪れたのは，大正七年（一九一八年）の秋，数え年三十三歳のときであった。

帰国後に執筆され発表された，谷崎の旅行記や随筆等によって，その折の旅程を概観すると，以下のようになる。（Ⓐ，ⓐ，〈a〉などの区別は，出典による記述の相違を示す）

〔一〕　回想された旅程

Ⓐ　十月九日（水）

東京出発（「支那旅行」[注1]，以下「旅」と略記）

ⓐ　十一月上旬

東京を立つ（「奉天時代の李太郎氏」[注2]，以下「奉」と略記）

Ⓑ　鮮 → 満州（「旅」）

ⓑ　京城 → 平壌 → 新義州 → 奉天（「奉」）

〈b〉　朝鮮 → 支那の領土 → 奉天の木下李太郎氏の家（「支那劇を観る記」[注3]，以下「劇」と略記）

Ⓒ　十一月中旬の十日間ほど

奉天の李太郎君の家に宿泊（「奉」）

市内遊覧やレコード鑑賞（「奉」）

Ⓒ　平康里の中華茶園にて観劇（「劇」）

〈c〉　松鶴軒や小楽天にて支那料理を食す（「支那の料理」[注4]，以下「料」と略記）

Ⓓ　天津における，観劇（「劇」）と食事（「料」）

Ⓔ　十一月三日（日）

北京を発す（「廬山日記」[注5]，以下「廬」と略記）

ⓔ　十月下旬から十一月三日までの十日間前後

北京滞在，琉璃街（琉璃廠）にて支那劇関係の書物を購入したり，広徳楼にて梅蘭芳の京劇を観たり（「劇」），新豊楼にて山東料理を食す（「料」）

Ⓕ　十一月上旬

列車で漢口到着（「旅」）

武昌の黄鶴楼にて海参を食す（「料」）

Ⓖ　十一月十日（日）

漢口から揚子江（長江）を下り九江に到着（「旅」，「廬」）

ⓖ　湖上遊覧（「廬」，「西湖の月」[注6]，後者については，以下「西」と略記）

Ⓗ　十一月十一日（月）

廬山に登る（「旅」，「廬」）甘棠湖，香炉峰，蓮花洞，東林寺，仙人洞，

天池などを観る（「廬」）

I　十一月十二日（火）

九江に戻る（「旅」）

J　十月二十日頃

南京到着（「旅」）

ⓘ　十月下旬

長松東号にて南京料理を食す（「秦淮の夜」[注7]，以下「秦」と略記）

夫子廟などを観る（「南京夫子廟」[注8]，以下「南」と略記）

秦淮河岸にある奇望街散策（「秦」）

K　十月二十二日～二十五日

蘇州滞在（「蘇州紀行前書」[注9]，以下「前」と略記）

十月二十二日（金）

午前中に南京を発し，夕方の五時頃蘇州駅に着く（「前」）

十月二十三日（土）

驢馬に乗って市内遊覧（「前」）

十月二十四日（日）

天平山遊覧（「前」，「蘇州紀行」[注10]，後者については，以下「蘇」と略記）

画舫を雇って，運河を漕ぎ廻る（「前」，「蘇」）

十月二十五日（月）

上海へ向かう（「前」）

L　十一月下旬

上海滞在（「西」）

M　旧暦の十四日（土）

午後二時半，上海北駅から列車で杭州へ（「西」）

N　旧暦の十四日（土）

午後七時少し過ぎ，杭州到着（「西」）

清泰第二ホテルに宿泊（「西」）

銭湯に漬かった後，外食で東坡肉などを味わう（「料」，「西」）

旧暦の十五日（日）

西湖の畔りを散策（「西」）

画舫に乗って湖上遊覧（「西」）

旧暦の二十日（金）ごろまで

杭州滞在（「西」）

西湖鳳舞台で張文艶の新劇を観る（「劇」）

皮蛋，炒餅，粥飯などを食す（「料」）

O　十二月上旬

上海滞在（「旅」，「劇」，「料」）

大世界にて人形芝居を見る（「劇」）

P　十二月上旬～中旬

十二月九日ごろ帰国（「旅」，「劇」）

年の暮れに帰国（「前」，「西」）

東北地方（旧満州）の遼寧省から天津 → 北京 → 河北省 → 河南省 → 湖北省 → 江西省 → 安徽省 → 江蘇省 → 浙江省 → 上海までの八省三直轄地にわたる二箇月余の旅程であった。

〔二〕　日次の不整合

ところで，上記の回想された旅程には，事実と違った記述が見られる。勿論，小説化された文章の記述にも拠っているので，すべてが事実通りでないのも肯けるが，旅行記，エッセイの類が，事実を無視してはなるまい。

以下，谷崎の記憶違い等による誤記を改めることにする。

（その一）東京出発の日はいつか？

Aには「十月九日」，ⓐには「十一月上旬」とあるが，これは，Aの「十月九日」が正

しい。

というのは，朝鮮経由で中国入りした谷崎が，最初に寄宿した先の友人である木下杢太郎の日記には，次のように記されているからである。言うまでもなく，当時，杢太郎は奉天（藩陽）にいた。

一九一八年（大正七年）の日記[注11]

13．Oct. 日（十月十三日，日曜日，西田注）
釈黙笑ヲ尋ネル

18．
谷崎ト城内ニユク

19．X.
午後谷崎山下ト北陵ニユク

20．Oct. Sontag
皇寺ニ釈黙笑ヲ尋ネル

杢太郎の日記によれば，少なくとも，十月十八日と十九日には，杢太郎自身が谷崎を，奉内城内や郊外にある北陵に連れて行っていることがわかる。

とするならば，ⓐの「十一月上旬」出発は成り立たない。

「マル二ヶ月」[注1]や「二た月ばかり」[注3]の滞在で「年の暮れ」[注9]に帰国したという記述からも，十月九日の出発で，十二月上旬から中旬ごろの帰国であったと思われる。

因に，帰国後の執筆である「支那旅行」は，十二月十九日に書かれた。

ⓐの記述は，還暦の年の回想記でもあり，おそらく，谷崎の記憶違いであると思われる。

筑摩書房の現代日本文学全集18『谷崎潤一郎集』の年譜には，大正七年の条に，

十一月上旬，家族を父の家に預け，単身中国旅行に赴く

とあり，このような理解は，ⓐの記述として回想されたことがらに拠ったのでもあろうか。十一月上旬出発説は意外と多い。[注12]

ともあれ，すでに十月の十八日に中国の奉天に滞在している谷崎が，十一月の上旬に，初度訪中の旅に出発する筈がない。

（その二）奉天滞在はいつからいつまでか？

Ⓒの「十一月中旬の十日間ほど」は，ⓐの誤解につながるものであり，「十月中旬の十日間ほど」と改められるべきであろう。

ところで，十月中旬はよろしいとしても，十日間ほどとは，いつからいつまでであろうか。

「十日ばかり」[注2]，「十日の間」[注2]という他の記述からも，奉天の滞在日数は十日間と考えてよろしいかと思う。

上に示した杢太郎の日記からは，十月十八日と十九日をふくむ十日間であることだけは明らかである。

当時，東京から朝鮮を通って中国に入るには，どれほどの日数を要したであろうか。

谷崎より十二年前の明治三十九年に中国を訪ねた徳富蘇峰は，朝鮮と中国の国境の河である鴨緑江を小蒸汽で渡り，安東と奉天間を安奉軽便鉄道を利用し，東京から六日間かかって奉天に着いている。[注13]

そして，その旅を記した紀行文の中で，本式の鉄道になれば，四日間で着くだろうと述べている。

さて，十二年後は，どうであったろうか。谷崎より一箇月ばかり前に，同じ朝鮮経由で

中国入りした先人がいた。上述の木下杢太郎である。彼は，所用のために，一時帰国していた。

大正七年九月の日記[注11]には，以下のような記述が見られる。(記事は適宜省略する)

8．(九月八日の意，西田注)

汽車ニ乗レル．

三宮発．

〔欄外〕8日夕神――9午前下関，九夜釜山　10朝京城（予定に関したメモか？　西田注）

9．

Sleeping carナシ

海峡風波アリ．昼飯ハトレタレドタメシハ不味．Dial 0.1ノミテヌルウチニ釜山ニ着　丼ヲ食ヒニユク

Hotel.

10.

朝停車場前ノ広場ニテ兵隊ガexercisesス．為メニ朝 7.20発

汽車ハ京城ニハ明朝黎明ナラデハ着カズ

9時（夜の九時，西田注）大田ニテ弁当ヲ使ヒDial 0.1ニテ寝ル

11. Sept.

京城ハ朝5時ゴロ

午後四時半平壌に下ル、

午前三時13分再ビ北行ノ汽車ニ乗ル

12. Sept.

午後一時半安東県

13. Sept.

午後五時半頃奉天着

神戸の三宮を八日の夜に発って，十三日の夕方に，杢太郎は奉天に着いたことになる。まる五日間の旅程であり，釜山での軍事訓練に遭遇しなければ，四日あまりの日数であったかと思う。蘇峰の予見はほぼ正しかった。東京――→奉天は五日間と見るのが妥当であろう。

とすると，谷崎の奉天着は十月の十四日と推定してよかろう。

奉天駅には，杢太郎が迎えに来ていた[注2]。この日から十日間，谷崎は奉天に滞在し，杢太郎の世話になる。

私は滞在中，殆ど毎日杢太郎君と相携へて（中略）旧城内へ通はないことはなかった[注2]

という，谷崎の回想記によれば，十八，十九の両日以外にも，観劇や食事を共にしていたに違いない。

奉天の木下杢太郎氏の家に落ち着くと，早速芝居を案内してくれるやうに同氏に頼んだ（中略）平康里の中華茶園とか云ふ劇場へ案内して貰った[注3]

とか，

朝鮮から満州へ這入って最初に喰べたのが奉天城内の松鶴軒といふ家であった。（中略）もう一軒小楽天と云ふ家へも往った[注4]

という記述が，そのことを証している。

こうして，奉天から次の滞在地〈天津〉に向かったのは，十月の二十三日か二十四日ごろであったろう。

杢太郎日記の十月二十五日の条に，

山下来テ十二時マデ在，チク音キヲヤル[注11]

とあるが，もしもまだ谷崎が滞在中であると

すれば，「チク音キ」をかけるようなことはないと推測されるからである。

というのは，上記回想文の中で，谷崎は次のように述べている。

> 同君〈杢太郎のこと，西田注〉は（中略）中国の古代文化に興味を寄せつつありながら，なほ一と昔前の江戸趣味や歌沢情調からも脱却することが出来ず，時々芝金のレコードなどを懸けて，纔かに客愁を癒してゐたが，或る日私がその矛盾をやゝ嘲笑的な口調で冷やかすと，座にゐた某医学士も大いに私に賛成したことがあった。すると同君は，（中略）それから二三日と云ふものはひどく機嫌が悪かった。[注2]

この回想によれば，谷崎の滞在中，一、二度はレコード鑑賞をしたであろうが，谷崎に揶揄されたあと，谷崎の前でレコードを聴く筈がないと考えるのが自然であろう。

批判者が不在になって，杢太郎は心おきなく蓄音器に親しんだのである。なお，「座にゐた某医学士」は，日記の「山下」であろうか。彼は，南満医学堂に奉職していた木下杢太郎教授の後輩で，しばしば日記に登場している。

（その三）　北京滞在はいつからいつまでか？

Ⓔの「廬山日記」の十一月十日の条に，

> 北京を発してより実に一週間目の青空なり[注5]

とあるので，北京には十一月三日まで滞在していたことがうかがわれる。

因に，当時北京に住んでいた魯迅の日記には，十一月三日の天候が記してあり，「晴」[注十四]とある。夜からは雨になったようであるが，谷崎は十一月三日の晴れているうちに，北京を発ったのである。

それでは，北京滞在はいつからであったろうか。ⓔⓔの「支那劇を観る記」[注3]には，

> 北京には前後十日ばかり滞在してゐたとあるので，十月二十五日ごろから十一月三日までの滞在と推定するのであるが，若干の問題は，天津滞在の期間である。
>
> 天津でも到る処の芝居小屋を覗いて見た[注3]
>
> とあるので，少なくとも二、三日は滞在していたと考えられる。

上に，奉天滞在を十月十四日から十月二十三日ごろと推定したので，夜行列車に乗らなかったと仮定して，天津二泊三日の滞在である。果たして，その間に，「到る処の芝居小屋を覗いて見た」り，中国料理を食したり出来たのであろうか。北京滞在の「前後十日ばかり」を九日間とすれば，三泊四日で大凡可能になろう。

（その四）　南京へ行ったのは十月の二十日頃か？

Ⓙの「支那旅行」[注1]には，

> 南京へ行ったのは恰度十月の二十日頃で，蟬が鳴いて居た

とあり，Ⓚの「蘇州紀行」[注10]にも，

> 日本の十月に較べれば非常な相違である。（中略）何しろ四五日前の南京では蟬が鳴いて居た

とある。

蘇州滞在が十月二十二日から二十五日までの四日間と捉えられているので，その四、五日前は，まさに十月二十日頃となる。

十月二十日頃，谷崎はまだ奉天に居る。南京に行く前は廬山の近くに居た[注5]。十一月

の十日から十二日までの三日間である。

十一月十日が日曜日であることは，「廬山日記[注5]」も，魯迅の「戊午日記[注14]」も符合している。

ところが，「蘇州紀行」の十月二十四日の記事には，

> 今日は日曜で上海から日本人の団体が紅葉見物に繰り込む[注10]

とある。

十一月十日が日曜日の場合，十月二十四日は木曜日でなければならない。魯迅の日記も，李太郎の日記も，十月二十四日が木曜日であることを証している。

南京の十月二十日頃も、蘇州の十月二十四日も、実際には一箇月ズレていたのを、錯角してしまったのではないだろうか。

そうであるならば、十一月二十四日は間違いなく日曜日である。

廬山を十一月十二日に発って、以下、九江を経て、凡そ一週間後に、南京に入ったと解される。

そうすると、「廬山日記」の日次の二日目と三日目の記述も、一箇月ズレの誤記ということになる。一日目が「十一月十日」と記されてあって、二日目と三日目が「十月」では理に合わない。

また、一日目を「十月十日」とすると、谷崎が東京を出発した頃になってしまうので、やはり「十一月」のこととしなければならない。

廬山（九江をふくむ），南京，蘇州の滞在期間は以下のように整合される。

十一月十日（日）～十二日（火）九江，廬山滞在

十一月二十日（水）～二十二日（金）南京滞在

十一月二十二日（金）～二十五日（月）蘇州滞在

ところで，残された問題は，新暦の十一月二十日頃に蟬が鳴くだろうか，ということである。夏には〈三大火炉〉の一つといわれる南京であっても，晩秋の十一月に蟬が鳴いたり，楊柳が春のような趣を見せる[注1]だろうか。

小説風に書かれた「秦淮の夜」には，主人公の「私」が，九月中に南京に来れなかったことを残念に思っている記述がある。それは，画舫の繁昌が九月の末頃までだからであると，作中人物に語らせている。

> 私はつくづく，今一と月早く来なかった事を後悔した[注7]

という記述は，「私」が十月になってから，南京に来たことを示している。上述の考証に合わせれば，この〈十月〉も錯覚である。

また，この前後の文章には，「此の頃は時候が寒くなったから」とか，「陽気の暖かい時分にもう一遍遊びに来なければ」といった記述も見られる。

「秦淮の夜」における錯覚十月の夜は，いわゆる〈秋〉の気候である。

「冷たい夜風」や，「冷え冷えと身に沁みる深夜の外気」や，「寒さうに頸をわななかせながら」などの記述もある。深夜の状況とはいいながら，まさに晩秋に相当する情景の描写である。

なお，「秦淮の夜」における，「今夜は月がいい筈だし」や，「やうやう六時を過ぎたほどだのに，（中略）月はまだ上ってゐないや

うである」や，「十時過ぎであったらう。（中略）いつの間に月が出たのか，薄曇りの空を漏れてくる淡い光が（中略）青白い影を映して居る」や，「月が朦朧たる光を投げて，（中略）ほの明るい」や，「月は全く沈んでしまった」の記述からは，下弦の月の描写であるとも思えるが，そうすると，「月は全く沈んでしまった」という記述は，おかしいことになる。下弦の月が，夜明け前に沈むことはない。

天候はそれほど良くなかったようであるから，雲に隠れて全く見えなくなってしまったというなら宜しいのであるが，「沈んでしまった」の表現が気に懸かる。

逆に上弦の月と解しても，六時過ぎになっても昇っていない様や，十時過ぎになって月の光を確認している記述からは，上弦の月も成り立たないのである。

十一月二十日過ぎの南京滞在とすれば、旧暦の十月十七日過ぎになり、下弦の月が妥当である。そして、その夜は晩秋の寒さであった。

（その五）　上海滞在はいつからいつまでか？

紀行小説ともいうべき「西湖の月」に，上海出張のことが記されている。

> 秋の末つ方，（中略）上海の方へ一箇月ほど出張を命ぜられた時の事であった。[注5]

小説の記述なので，事実そのままではないだろうが，秋の末（十一月）から十二月までの一箇月ほどと理解してよいかと思われる。

谷崎の帰国は，「支那旅行」，「支那劇を観る記」によれば，十二月の九日ごろで，「蘇州紀行前書」の「去年の暮れに私が支那から帰って来ると」の記述や，十二月十九日執筆[注1]の記録からも，遅くとも十二月の中旬であるかと思われる。

蘇州を発ったのは，上述のように十一月二十五日であった。そして，その日のうちに上海に着いた筈である。

上海滞在は，杭州旅行もふくめて二週間から三週間ぐらいであったと思われるが，上記の「上海の方へ一箇月」とは，上海到着の日からではなく，〈上海方面〉すなわち江南の地である江蘇省南部と上海を合わせた捉え方であったと解される。

したがって，南京到着のあたりから計算しても好いのである。とすると，南京到着は十一月二十日であったから，それから一箇月ほどの十二月中旬と解し得るのである。杭州旅行をふくめて，上海滞在は十一月二十五日から十二月十五日ごろまでということになろう。大凡三週間の期間である。

上海では，新劇を観たり，大世界での人形芝居を観たり[注3]，まずい西洋料理を食したり[注4]している。

（その六）　杭州旅行はいつからいつまでか？

紀行小説「西湖の月」には，次のように記されている。

> 十一月の，――何日であったかはハッキリと覚えて居ないが，ちゃうど杭州の西湖へ着いて二日目の晩が美しい満月の夜であったから，上海を立ったのは旧暦の十三日か四日の午後であったらう。[注6]

小説としての記述なので，事実性にこだわる必要はないが，初度訪中の全旅程のあらましを確認する意味で，参考にすべき記述では

ある。

ところで、新暦の十一月と旧暦の十月は、一箇月と三日ズレている。

したがって、谷崎が上海に入った日は、十一月二十五日、旧暦の十月二十二日であると思われる。

そうであるならば，上海と杭州の滞在は，十一月二十五日から十二月十五日ごろまでとなり，旧暦の十月二十二日から十一月の十二日ごろまでとなり，杭州の西湖にて，〈満月〉を観賞することは不可能ということになる。

小説の主題が，西湖の満月にあることは明らかであり，事実を超えた真実を書いたのであろうか。

満月の時期に関しては問題が残るとして，杭州旅行の期間は，いつからいつまでだったのだろうか。

上記「西湖の月」には，二例のキー・センテンスが見られる。

①土曜日とは云へ二等室がこんなに混雑して居る

②一週間ほど滞在する予定であった[注6]

十一月二十五日から十二月十五日ごろまでの期間で，土曜日にあたるのは，十一月三十日，十二月七日，十二月十四日の三回である。このうち，帰国のころと解される十二月十四日は外すべきであろう。

十二月七日はどうであろうか。〈一週間の滞在〉とすると，上海に戻るのが帰国直前なので，これも少々無理ということになろう。

残りは，十一月三十日（土）の杭州行きということになる。蘇州から上海に移り四，五日経っている。自然な日程といえよう。上に引用した「十一月の，――何日であったか」にも，かろうじて引っ懸かる日次である。

其の日は，「西湖の月」の記述によれば，「中国の南部ではまだそんなに寒くはない。（中略）冬服だと日中は汗を掻くくらゐで，ただ朝夕の空気が冷え冷え[注15]と，（中略）紅葉はちゃうど見ごろであるし，空は毎日カラカラに晴れて居る」という晩秋の一日であった。因に，十一下旬の北京の天候は，二十一日と二十九日の〈曇〉を除けば，残り八日間すべて〈晴〉であった。

午後二時半に，主人公の「私」は，上海北駅から杭州行きの列車に乗った。大凡五時間近くの旅である。

現在の上海――杭州間は，最も速い特急で三時間四十分[注16]，急行で四時間前後，準急で四時間四十分ぐらいである。〈松江〉，〈嘉興〉の途中停車とすると，現在の急行列車の感覚である。

午後七時少し過ぎに，列車は杭州へ着いた。たちの悪い車夫の車に乗ってしまい，〈清泰第二ホテル〉に着いたのは，二時間以上も経過してからであった。

杭州では，観劇，食事，そして西湖遊覧を心ゆくまで味わい，上海に戻った。おそらく十二月の上旬であったろう。

〔三〕 初度訪中後における〈あこがれ〉と〈恐れ〉

こうして，二箇月間の中国旅行は終わった。

初めて経験した中国での生活は，谷崎潤一郎に何をもたらしたのであろうか。

その答えを考える前に，谷崎における初度訪中を簡潔に整理してみよう。

帰国後発表した文章と，滞在，遊覧地の関係を表にしてまとめると，次のようになる。

	奉天	天津	北京	武漢	九江	廬山	南京	蘇州	上海	杭州
①支那旅行							○	○	○	
②南京夫子廟							○			
③蘇州紀行前書								○		
④秦淮の夜							◎			
⑤蘇州紀行								◎		
⑥支那劇を観る記	○	○	○						○	○
⑦西湖の月										○
⑧支那の料理	○	○	○	△			○		△	○
⑨天鵞絨の夢[注17]										○
⑩蘇東坡[注18]										○
⑪廬山日記					○	○				
⑫支那趣味と云ふこと[注19]										
⑬奉天時代の杢太郎氏	○									
	3	2	2	1	1	1	5	4	3	5

（◎印→2回にわたって発表，△印→マイナス印象の記事をふくむ）

こうしてみると，谷崎にとって印象の深かった地域は，南京，杭州，蘇州，奉天といったところである。

①には，次のように記してきた。

> 気に入ったのは，南京，蘇州，上海の方面である。あの辺は北方から見ると景色も非常によいし，樹木もよく茂り，人間も綺麗であった。汽車などもズットよくなって居るし，気候も大変よい。

一つの証しといえよう。

谷崎の江南贔屓は，三年後に訪中した芥川龍之介の北京贔屓と対照的で興味深い。友人や知人宛の芥川の書簡には次のような記述が見られる。

> ⓐ　北京はさすがに王城の地だ此処なら二三年住んでも好い（六月十四日，岡栄一郎宛）
>
> ⓑ　北京に惚れこみ候，僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり（中略）北京の壮大に比ぶれば上海の如きは蛮市のみ（六月二十一日，室生犀星宛）

江南の諸地域に次いで，奉天でのことを比較的多く記しているということは，言うまでもなく，此処が中国に入って最初の滞在地であり，しかも其処に，いろいろ世話をしてくれた木下杢太郎がいたからである。この杢太

郎から，谷崎は，中国で過ごすことのイロハを教わったに違いない。

次にジャンル別，テーマ別に概観してみよう。

いわゆる紀行文は，①，②，③，⑤，⑪の五篇，小説・戯曲の類が，④，⑦，⑨，⑩の四篇，随筆・回想記が，⑥，⑧，⑫，⑬の四篇で，このエッセイのテーマは，それぞれ〈支那劇〉，〈支那料理〉，〈支那趣味〉，〈奉天の友人〉である。

谷崎における南京と杭州は，小説や戯曲を生み出した浪漫的夢幻の世界であり，中国料理の美味い土地でもあった。

また，蘇州と廬山は風光明美な遊覧の地であり，北方の奉天や北京は，演劇や文学や料理に関した中国文化の都であったといえよう。

ともあれ，帰国後の谷崎には大きな変化がおとずれた。谷崎は，その実感を次のように述べる。

> 私は，斯くの如き魅力を持つ支那趣味に対して，故郷の山河を望むやうな不思議なあこがれを感ずると共に，一種の恐れを抱いて居る。[注19]

「一種の恐れ」，それは，芸術に対する勇猛心を銷磨させ，創作への熱情を麻痺させるかも知れない不安であるという。

恐れを抱きながらも，その支那的なるものに対して心惹かれていく自分を，谷崎は，いかんともしがたい存在と思っている。

> 私は，自分が，特に誘惑を感ずるだけ，尚更恐れて居るのである。（中略）私は支那を恐れながらも，私の書棚には支那に関する書籍が殖えて行くばかりである。[注19]

こうして谷崎は，子供の時に漢学の塾に通ったこと，母親から『十八史略』を教わったことなどを回想し，改めて李杜の詩美に感嘆する。

初度訪中後における谷崎潤一郎のいのちの日々は，以下のように収束されるであろう。

> 此の後の私はどうなって行くか，――今のところでは，成るたけ支那趣味に反抗しつつ，やはり時々親の顔を見たいやうな心持で，こっそりと其処へ帰って行くと云へるやうな事を繰り返してゐる。[注19]

そして，その日々は，大正十五年（一九二六年）の中国再訪につながっていくのである。

谷崎潤一郎の中国再訪については，次の機会に述べることにしたい。

注1　『雄弁』大正八年二月号
注2　『芸林間歩』昭和二十一年十月号
注3　『中央公論』大正八年六月号
注4　『大阪朝日新聞』大正八年十月
注5　『中央公論』大正十年九月号
注6　『改造』大正八年六月号
注7　『中外』大正八年二月号，『新小説』大正八年三月号
注8　『中央文学』大正八年二月号
注9　『中央公論』大正八年二月号
注10　『中央公論』大正八年二月号，三月号
注11　『木下杢太郎全集』（岩波書店）
注12　『伝記　谷崎潤一郎』（野村尚吾），新潮日本文学アルバム略年譜は十月出発，十二月帰国である。
注13　「安東県より奉天」，『世界紀行文学全集（中国編Ⅰ）』所収

注14　「壬子日記」，『魯迅全集』（学習研究社）第十七巻〈飯倉照平ほか訳〉

注15　「ㄓㄥˇㄓㄥˇㄌㄤˇㄌㄤˇ」と縦書きであるが，横組みのため「冷え冷えと」とした

注16　「全国鉄路列車時刻表」（一九九〇年）による

注17　『大阪朝日新聞』大正八年十一月～十二月

注18　『改造』大正九年八月号

注19　『中央公論』大正十一年一月号

谷崎潤一郎と中国　（摘要）

西田禎元

少年時代から漢学の塾に通ったり；母親から『十八史略』を教わり，長じてからは，『麒麟』を初めとした，中国の歴史に取材した数篇の小説を発表していた谷崎潤一郎が，中国大陸を初めて訪れたのは，大正七年の十月である。

二箇月ほどの中国滞在中，谷崎が受けたカルチャーショックは強く深く，帰国後に十数篇の文章を発表するとともに，いわゆる〈支那趣味〉のとりこになる。

そうした谷崎の，中国趣味に対する憧れと恐れを確認しながら，彼自身が発表した文章の，錯覚や記憶違いなどによる誤りを正し，不明確な旅程を明らめることに努めた。